

愛知県南知多町日間賀島における通過儀礼の変遷 —離島の少子高齢・過疎化について—

The change in rites of passage on Himakajima Island, Minamichita Town, Aichi Prefecture:
The case of a depopulating and aging society

尤 銘煌¹

YU Ming-Hwang

Abstract

There are three small islands (Himakajima, Shinojima, Sakujima) off the Chita Peninsula, south of Nagoya city. Himakajima is the smallest one; however, most of the population and prosperity count on tour business. Besides, Himakajima has preserved the traditional rites of passage better than other islands. The simplicity of Rite passage has not been influenced by depopulation but by time change. In the beginning, the place of delivery and death was from the residents' own houses to hospitals. Then, the place of wedding ceremony from their own houses on the island was shifted to the off-island wedding ceremony hall. Furthermore, the prosperity from tour business has made some culture exchanges more active with off-island's people. Thus, the traditional rites of passage eventually become Urbanization.

Wedding ceremonies have been changed dramatically. On the other hand, Yakubarai (the ceremony to scare away evil spirits) and funeral ceremony have had slight changes. According to the interviews, most of the islanders in Himakajima are Fisherman, who is always facing a lot of life danger. In addition, islanders helped each other instead of funeral company during the funeral ceremony.

There is one feature coming out from the questionnaire. The ceremony regarding celebrating long-life almost doesn't exist in Himakajima. The ceremony of celebrating long-life is considered as the Yakubarai.

キーワード：離島、日間賀島、少子高齢、過疎化、通過儀礼

1. 緒言

この半世紀あまりの間に、人々の考え方や物事に関する価値観などが著しい変化を遂げた。それは、社会情勢の変化と不可分であり、もちろん、人生における大きな節目である通過儀礼も例外ではなく、時代とともに変貌の波に押し流されてきた。それらが、日間賀

¹ 山形大学国際センター（2009年10月1日より基盤教育院） 准教授

島という本土から海で隔絶された小島ではどのような変遷の過程をたどってきたかを分析してみたい。

本調査は財団法人東海冠婚葬祭産業振興センターの助成調査研究により「東海地域における通過儀礼の特徴・変遷—離島の過疎化・少子高齢化を中心として」を作成するために行ったものである。愛知県の離島における通過儀礼の事例を一つの資料にしたい。離島である日間賀島の特殊性をつかみ、「木から森を見る」ように東海地域の離島から日本における通過儀礼の特徴・変遷と少子高齢・過疎化の相互関係の全体像を把握したい。

調査研究の方法として主に文献調査、インターネット情報収集、聞き取り調査とアンケート調査を採用した。調査時間は2008年6月7日から9日である。以下の方々に聞き取り調査を行った。

協力者：

宮地いつえさん（76歳）元漁業組合会長、宮地弥さん（76歳）理髪院経営者、高橋公雄さん（51歳）安楽寺住職、中山勝比古さん（58歳）日間賀観光ホテル代表取締役社長、鈴木宏之さん（61歳）日間賀島観光協会会長、鈴木斧美さん（61歳）日間賀島観光協会事務局職員

2. 日間賀島の概況

2.1. 気象・地理と生活環境

日間賀島は愛知県知多半島の師崎港から約1.8キロで周囲は5.5キロ、面積は77ヘクタールである。愛知県の渥美半島と知多半島に挟まれている三河湾に浮かぶ三つの島（日間賀島・篠島・佐久島）の中で最も小さな島であるが、人口が最も多くて観光客の数も三島の



日間賀島の位置図²

² 「島の小学校めぐり」 <http://geo.shimanogakkomeguri.com/>

中で最も多い。「タコ（多幸）の島」、「フグ（福）の島」と呼ばれている日間賀島は良質なタコとトラフグがたくさん漁獲されることでよく知られている。名古屋地方気象台によると平成19年度、南知多の年平均気温は16.1度で、最高気温36.1度、最低気温-0.9度である。日間賀島は南知多に属し温暖な気候、豊かな自然で過ごしやすい地域である。

知多半島の河和港、師崎港か渥美半島の伊良湖港からいずれも名鉄の高速船で約10～30分で日間賀島へアクセスすることができる。その他、海上タクシーもあるので、本島との交通は便利である。東地区と西地区がそれぞれ東西に位置して東港と西港がある。東地区では、民宿が集中している観光業であるが、西地区の黒く塗られた板囲いの家並みは「日本の原風景、三河湾の黒真珠」と言われている。「国道1号線」と呼ばれる島のメイン道路は東地区と西地区を繋げ、端から端まで自転車で約20分かかる。コンビニと映画館がなく診療所は1ヶ所で週3日間半しか診療を行わない。

2.2. 経済

漁業と観光業が島の経済を支えている。島全世帯の約8割が漁業に携わっている。漁業が盛んに行われている。島の漁業の種類別及び漁獲量は以下の通りである³。

表1 日間賀島の漁業の種類別及び漁獲量

(単位：t)

区 分	平成13年	平成14年	平成15年
総 数	2,740	2,834	3,927
船びき網	1,441	1,217	2,281
小型底びき網	489	593	537
刺 網	40	61	89
釣	32	30	21
はえ縄	34	63	35
採 貝	113	105	122
その他の漁業	96	167	212

魚の種別は主にしらす、いかなご、あなごで水産動物類はえび類、たこ類、いか類、しゃこ類で貝類は波貝とあさり類が中心である。特にシラスの水揚げ量が最も多い。

日間賀島の観光業は明治時代に湯治、療養のために発展し始めた。もともと同じ三河湾の篠島より観光業の発達が遅れた。平成2～3年に東地区と西地区にそれぞれに人工の海水浴場を作ったり、平成5年に島のメイン道路を整備したりして、現在では、愛知三島の中で本島との交通は最も便利で宿泊の受入れ体制も最も整っている。また、1980年代からイルカとのふれあい活動、漁業体験、キッズアドベンチャー、島の水産ブランド（島のり、日間賀タコ、日間賀フグ、波美貝）などに力を入れた結果、今日では、愛知三島の中で観光業が最も発達した島となっている。

³ 『篠島、日間賀島の概要』愛知県南知多町企画情報課、2006.3.p.14.

表2 愛知三島の旅館、民宿等の軒数と受容人数（2006年3月31日現在）⁴

	佐久島	日間賀島	篠島
旅館、ホテル	2軒 80人	16軒1,120人	16軒915人
民 宿	8軒275人	63軒2,018人	27軒848人

観光客の数は80年代に50万人を突破してピークを迎えたが、日本バブル経済崩壊の影響を受けて90年代に30万人台までに減少した。さらに2002年には20万人台にまで落ちた。2007年現在では、観光客数は未だに回復していない。

表3 日間賀島の観光客数の推移⁵

(単位：千人)

年	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
観光客数	304	340	310	296	272	288	272	258	277

2.3. 人口構成の推移

日間賀島の人口が一番多かったのは1955年の2,788人で、その後減少が続き2008年10月1日現在では2,231人となっている。人口密度は全国離島の中で最も高い。愛知三島の中で人口の減少率は最も低い、少子高齢・過疎化はゆっくりと進んでいる。1980年に設置された内海高校の日間賀島分校は、生徒数の減少により2001年閉校した。島外からの嫁を除けば、本島からの移住者がほとんどいないのが現状である。

表4 日間賀島の人口と世帯数の推移⁶

(単位：世帯、人（各年10月1日現在）)

年	1935	1955	1970	1990	2005	2006	2008
人 口	1,951	2,788	2,622	2,397	2,164	2,283	2,231
世帯数	373	489	594	658	639	647	643

表5 佐久島・日間賀島・篠島について⁷

島 名	総面積	2006年人口 (単位：人)	2005年観光客数 (単位：人)	2005年 高齢者比率	2005年一人暮らし 高齢者比率	2006年5月1日現在小・ 中学校の児童・生徒数 (単位：人)
佐久島	181ha	326	40,000	48.3%	28.8%	小学生：14 中学生：11
日間賀島	77ha	2,280	272,000	26.1%	8.8%	小学生：117 中学生：76
篠島	93ha	1,983	245,000	25.8%	9.6%	小学生：112 中学生：62

⁴ 『愛知の離島』愛知県地域振興部地域政策課、2007.3.p.24.

⁵ 『篠島、日間賀島の概要』愛知県南知多町企画情報課、2006.3.p.25.

⁶ 愛知県知多郡南知多町役場『データブック南知多平成20年度版』愛知県南知多町企画情報課、2008.p.15.

⁷ 『愛知の離島』愛知県地域振興部地域政策課、2007.3.

3. 日間賀島における通過儀礼の変遷

3.1. 出産儀礼

帯祝い：昭和20年頃には産婦が妊娠して5ヶ月目から穢れとみなされて、神社に入ることが許されなかった。また、赤ちゃんを出産して3日目か7日目から別屋に移って別火で調理し食事を行う。赤ちゃんは男の子であれば、50日、女の子であれば、31日ぐらい別屋での生活が続く⁸。穢れに対して忌み嫌う観念が強かった。現在では、河和市の厚生病院や半田市の藤田病院、市民病院などで出産することになった。出産に関する穢れの観念はほとんどなくなった。

妊婦が妊娠5ヶ月5日に身内だけで帯祝いを行っておはぎ（ボタモチ）を身内や親戚に配る。帯祝いは古くから続いてきた習慣である。さらし帯は実家からもらって病院で看護師より帯を締めてもらう。昔から安産祈願のため、妊婦はさらしを持って先に河和市の時志子安観音（慈雲山 影現寺）へ行って住職に祈祷してもらう人もいる。時志子安観音は安産祈願の神として霊験あらたかとされている。

3.2. 幼年期と年齢に関する儀礼

お七夜、命名式：赤ちゃんが生まれてから7日目に、赤ちゃんの名前を書いて神棚に貼って命名式を行う。その時に親戚を呼んで振る舞いも行う。帯祝いの時におはぎをもらった人がお七夜の時に出産祝いとしてお金を贈る。昔は子どもの衣類や品物などが出産祝いとして多かった。

お宮参り：東地区では、男女とも関係なく赤ちゃんが生まれてから110日目に日間賀神社と安楽寺のタコ阿弥陀へ参りに行く。西地区では、八万宮神社のみに参りに行く。今では両地区とも1月15日前後の日曜日に行われる。

お食い初め：昔から島には、お食い初めの習慣はない。

初節句：男の子は5月5日に、女の子は3月3日に初節句が行われる。男の子の場合は鯉幟を上げ、鎧冑人形を飾る。女の子は雛人形を飾る。男の子の節句に昔は粽、柏餅を各家で作ったが、現在では、菓子屋で買ってくる。4日の晩に菖蒲湯に入る風習が残っている。また、すすき、菖蒲、蓬、すいかんぼ⁹を縛って屋根や鯉のぼりの先に飾って神棚、仏壇、お墓にも捧げる。女の子の節句の場合はイカ饅頭、お越し物（がんと¹⁰）か、三色の餅15個を作って雛壇に飾る。男女が15歳になると「立て収め」と言って鎧冑人形と雛人形を片付ける。このような風習は長男と長女のみに行われる。

七五三：昔、七五三は「かみおき」と言って数えて3歳の男女のみ行った。現在では、満3歳、5歳の男女も行う。7歳はほとんど行わない。神社へ参り、神主に祈祷してもらう。東地区では、日間賀神社と安楽寺のタコ阿弥陀、西地区では、八万宮神社で行う。八万宮の神主は日間賀神社も兼任している。また、親戚を招いて赤飯を配ったり、振る舞いを行ったりしている。

⁸ 瀬川清子『日間賀島民俗誌』刀江書院、1951.p.38.

⁹ カタバミ科カタバミ属植物

¹⁰ 餅・饅頭などのこと

成人式：昭和50年頃までは、「若い衆（15歳～25歳）」があった。若い衆たちが「ネヤド」でいっしょに生活を行う。「ネヤド」の仲間同士は「朋輩（親友）」と言った。朋輩の絆が兄弟同様に強かった。若い衆の役割は、社会生活に必要なマナーを躰ること、祭礼や海岸の掃除などの行事を行うこと、火事や遭難などの緊急時に備えることなどであった¹¹。若い衆以外に大正時代に設立された青年団もあった。その後、若い衆の役割はだんだん青年団に移行したので、若い衆の組織はなくなった。昭和に入ってから南知多町役場が成人式を一括して行うことになった。現在では、青年団（西地区）とお祭り委員会（東地区）がある。

厄払い：前厄（41歳）、本厄（42歳）、後厄（43歳）の時に気をつけることとの謂れがある。戦後、厄年のイベントとして餅投げではなく本島の芝居屋を呼んで芝居を行ったり、島内の風呂屋（2軒）を1日無料開放したりしていた。現在では、42歳の厄払いとして男同士が旅行へ行く。また、お正月15日に25歳、42歳の男子が祭りの法被を着て神社で約240キロ分の餅投げを行う。その時、前厄と後厄の人及び厄年の家族は餅を拾わない。そして、老人会、小学校、保育園などに寄付を行った。

長寿の祝い：還暦の時に夫婦同士で旅行へ行く人がいる。一般的に長寿祝いは身内のみで行われる。島としての長寿祝いはない。

3.3. 結婚儀礼

昭和50年頃までには、若い衆が「娘遊び」によって結婚にまで進展したケースが多かった。昼に漁業をしている若い衆仲間グループは夜に娘がいる家へ行ってトランプをしたり、世間話をしたりした。日頃の仕事として娘たちは家でヨコ絞り（昭和7年にヨコ絞りが創業されてタテ絞りより加工賃が高かった。）や「くだまき（くだに糸をまく）」をしていることが多かった。娘の両親も「娘遊び」を黙認していた。恋愛の機会が少ない島では、「娘遊び」は、若い男女の交際場所を提供していた。榊原剛氏によると絞り加工業（大正8年に知多郡有松町からタテ絞りが導入されてきた）の普及により女性の職場を確保できたので、当時、島全体の人口の流失を防いだ¹²。

昭和41年の愛知大学黒木ゼミの調査によると、当時、島内婚が108件、島外婚（島以外の地域との間で行われる結婚）が64件で東地区から西地区へ嫁いだ者は12人で、逆に西地区から東地区に嫁いだ者はたった1人であった。島外婚は渥美が43件で最も多かった。近隣の篠島と佐久島はそれぞれ1件のみであった。昔から渥美との関係が深かった。逆に篠島と佐久島との交流は薄かった¹³。

島では、結婚を「嫁取り」か「嫁入り」と言う。昔は、婿は仲人といっしょにかけ魚（鯛かあいなめ）、お酒1升、結納金、提灯を持って嫁を迎えに行く。婿の家で三三九度を行う。三三九度は嫁と婿の両親で行われるのが特徴である。それから、披露宴を行った。現在では、島で結婚式を行わず、昔のような風習もなくなった。約20年前から神田市か名古屋市

¹¹ 榊原剛「日間賀島の若衆宿について」『郷土研究誌 みなみ』第84号、南知多町教育委員会、2007.11.15.p.2.

¹² 榊原剛「日間賀島の通婚圏」『郷土研究誌 みなみ』第83号、南知多町教育委員会、2007.5.15.pp82-pp.83.

¹³ 榊原剛「日間賀島の通婚圏」『郷土研究誌 みなみ』第83号、南知多町教育委員会、2007.5.15.pp80-pp.82.

で結婚式を行い、結婚儀礼も他地域と変わらなくなった。

3.4. 葬送儀礼

住職がいる寺は四ヶ所あるが、三ヶ所の寺のみ檀家がいる。人が亡くなると、まず役場に届けて火葬許可書をもらう。その後、「しにぶれ」と言って二人使いが島内を廻って親戚や友人などに知らせに行く。その時、和尚が枕経を唱えてから10人くらい念仏婆さんが念仏と百万遍を行う。念仏婆さんは葬式の前後と通夜の計3回に念仏を唱える。自宅で亡くなった場合は湯灌を行ってから納棺する。それから遺体を火葬場へ運ぶ。島には火葬場がないので、遺体は船で南知多町へ運ぶ。本島の病院で亡くなった場合は、看護師が湯灌を行う。そして船で遺体を島まで運ぶ。和尚の枕経、念仏婆さんの念仏、通夜などを経てから再び船で本島の火葬場へ運ぶ。

お正月一日と友引は火葬場が休業なので、火葬を行わない。死亡時間によって通夜と火葬の順序が変わる。葬式は遺体ではなく遺骨を前にして行うという骨葬（こつそう）で行う。通夜の時間は決まっていない。大体、暗くなってから始まる。通夜振る舞いは盛大に行われる。自宅の狭さ及び葬式会館がないなどの事情で、一般的に寺で葬式を行う。葬式組はないので、近隣、親戚、友人などが中心となって葬儀を手伝う。棺、生花、祭壇などは農協のやすらぎセンターに依頼する。死装束は昔、念仏婆さんが作ってくれたが、現在では、葬儀業者が持ってくる。香典の金額について島内の決まりはないが、香典返しをする場合は昭和41年（1963年）に、新生活改善運動（1955年の新生活運動協会の設立によって活発化した。総理府の助成を得ながら青年団・婦人会・公民館・町内会などを活動主体として、冠婚葬祭の簡素化、虚礼廃止、迷信の追放、保健衛生、衣食の改善、貯蓄奨励などが推進された¹⁴。）をよく行った結果、現在では、1キロの砂糖のみと定まっている。

葬列は寺から墓まで野辺送りが行われている。遺族がポケットに約1万円のお金（50円玉と100円玉）を入れて見送りに来た人に撒く。亡くなった人が50歳以上で戒名が庵住以上でないとこの儀式は行わない。帰りは別の道を帰る。葬列は和尚の引導を受けてから出発する。葬列の順番と持ち物は以下のようなものである。

喪主（長男）一塔婆

長男か次男—お骨

奥さん—霊膳（お供え物）

子ども—遺影（写真）

親戚—だんご、お菓子、飾り菓子、水おけ、松明、紙花、前机（だんごを載せる物）

野辺送りが終わったら、浜へ行って清めたが、現在では、家に入る前にちょっと塩を撒いて清めるのみである。その他、戒名についての格付けは院号、居士、大姉、庵住、善女、信士、信女、童子、童女などの順位であるが、島では、（戒名を）庵住とする人が多い。葬式後の法要はお葬式の日、初七日の法要を兼ねて行う。その後、七日毎に法要を行って四十九日忌まで行う。それから、百日忌、一、三、七、十三、十七、二十三、二十七、

¹⁴ 新谷尚紀、関沢まゆみ「民俗小事典」吉川弘文館、pp.168-pp.169.

三十三、三十七、五十回忌が行われる。

墓について昔、ムショウと呼ばれる埋め墓とラントウバと呼ばれる詣墓（寺の中）が共存した両墓制であった。漁村では、死の穢れがたいそう忌み嫌われるので、村のはずれの山中に埋め墓が置かれた。1980年代から土葬から火葬へ移行し、両地区の埋め墓も整備されていった結果、人々の死に対する穢れの観念も薄くなった。そして、両墓制がだんだん単墓制になってきた。現在では、和尚の墓を除けば、一般の人はほとんどラントウバ墓から埋め墓へ移った。葬式に関する迷信、言い習わしとタブーについて現在では、妊婦は葬式の役をしないこと、葬式に猫を入れないこと、遺族は1年間神社に入らないことなどしか残っていない。

3.5. 通過儀礼に関する生活改善事項¹⁵

昭和41年6月1日に西地区会・西漁業共同組合・消防団・青年団・婦人会・漁業婦人部の主催で生活改善事項を実施した。一方、東里では、昭和41年5月に生活改善事項が実施された。西地区の生活改善事項の中で通過儀礼に関するものは以下のものである。生活改善事項の実施が今日の島の通過儀礼が簡素化に繋がったと思われる。

1. 出生及び節句：七夜、初幟、初雛、七五三の祝いは次の者を招待することができる。仲人、親元、兄弟、姉妹、叔父、叔母相当以上の人。ただし皿盛料理、引菓子、記念品はなし。もし祝うならば長男、長女のみとする。
2. 結婚式：結婚式は神前で行うこと。祝いは皿盛料理、引菓子、鮎盛などはなし。
3. 厄年：厄年は餅投げ程度とする。ただし招待は廃止する。
4. 葬儀：花輪一対、生花一対、盛籠は五個以内とする。他町村からの贈物はそのかぎりにならず。香料返しは葉書五枚とする。お通夜不義の饅頭は廃止する。

4. アンケート調査概要

2008年5月7－9日の日間賀島を現地調査した時、日間賀島観光協会鈴木宏之会長に「島民の通過儀礼及び少子高齢・過疎化問題」についてのアンケートの実施を依頼した。最終的に合計19名の島民から回答があった。回答者の年齢は、20代1名、30代5名、40代10名、50代2名、60代1名である。性別は男性8名、女性10名、無記入1名である。職業は旅館業、民宿業7名、漁業3名、パート4名、主婦2名、会社員2名、無記入1名である。回答者は30代～40代の島民が中心であると思われる。以下、「島内にどんな通過儀礼が残っているか」、「行われなくなった通過儀礼は?」、「どんな通過儀礼を一番残してほしいか」、「島に住んで一番困っている問題」、「島が直面している一番の問題」などの各項目の結果を概観し、今後の課題について考察する。

¹⁵ 榊原剛「日間賀島の婚姻、しほり加工、若衆宿について」『郷土研究誌 みなみ』第82号、南知多町教育委員会、2006.11.15.p.40.

4. 1. 通過儀礼の変貌について（複数選択）

表6 アンケートの調査結果

項 目	どんな通過儀礼が残っているか	行われなくなった通過儀礼は？	どんな通過儀礼を一番残してほしいか
帯 祝 い	19	0	3
出 産 祝 い	19	0	7
お七夜、命名式	14	1	1
お 宮 参 り	19	1	5
お 食 い 初 め	0	5	1
初 節 句	18	0	7
初 誕 生 日	5	2	2
七 五 三	19	0	9
成 人 式	19	0	11
厄 払 い	19	0	12
長 寿 の 祝 い	5	3	2
結 婚 儀 礼	17	2	13
葬 送 儀 礼	17	0	13

以上のように島に残っている通過儀礼として帯祝い、出産祝い、お宮参り、七五三、成人式、厄払いを19人全員が選んでいる。その次は、初節句の18人で、結婚儀礼と葬送儀礼の17人と続く。島で行われなくなった通過儀礼と島民が考えるのはお食い初め（5人）と長寿祝い（3人）などである。そして残してほしい通過儀礼は、結婚儀礼（13人）葬送儀礼（13人）、厄払い（12人）、成人式（11人）、七五三（9人）、初節句（7人）の順となっている。古くから島では、長寿祝いはあまり行われなかった。食い初めを行う習慣もなかった。長寿祝い及び食い初めの代わりに島における子どもに関する儀礼（帯祝い、出産祝い、お宮参り、初節句、七五三）の儀式及び成人式と厄払いが大切にされてきたことがアンケートの結果に表れていると言えよう。また、結婚儀礼、葬送儀礼及び厄払いは島民にとって最も大事な通過儀礼であるとの認識が見られる。

4. 2. 島に住んで一番困っている問題及び島が直面している一番の問題

「あなた自身が島に住んで一番困っている問題は何ですか」という質問に対して買い物に不便、「物価が高い」、「映画が見られない」、「船代が高い」、「水道」、「ネオンが少ない」など8名が日常生活に関する問題を第1位に挙げている。「夜間の交通が不便」、「交通が不便」など7名が挙げる交通に関する問題が第2位である。確かに西港と名古屋市を繋ぐ河和市への最終便は17時45分となっており、夜の交通は不便である。

一方、「島が直面している一番の問題は何ですか」という質問に対して「人口の減少」、「子どもの島離れ」、「子どもが少ない」などと答えた人が最も多く7名いた。2名が挙げた「島内での就職」、「働ける場所がない」は仕事に関する問題であった。その他、「ゴミ処理」

と「物価が高い」が各1名あった。日間賀島も他島と同じように少子高齢過疎化が最も心配されていることがわかる。

4.3. 本島に引っ越すこと&祖先代々のお墓を本島へ移すこと

「将来、本島へ引っ越すことを考えていますか」と「祖先代々のお墓を本島へ移すことを考えていますか」という質問には、無回答の2名を除いて他17名は本島へ引っ越すことを考えていないし、お墓も本島へ移すことを考えていないと答えている。島民の島に対する愛着がアンケート調査からうかがわれる。

4.4. 少子高齢・過疎化対策及び政府がどのような対策を講じているか

島民が考えている少子高齢・過疎化対策で最も多いのは、「働き場所を増やす」、「雇用促進」など仕事に関する対策（6名）である。その他、島の活性化（3名）、老人医療施設（1名）などである。仕事場の確保が最も大事であるとアンケート調査結果から考えられる。その一方、政府がどのような対策を講じているかとの質問に対して、離島振興法と観光事業に対する補助金が各1名だったが、残りは「何もしていない」が無記入であった。ほとんどの島民は政府が離島における少子高齢・過疎化対策をほとんど講じていないと考えている。

4.5. 通過儀礼を島に残す一番の方法

「通過儀礼を島に残す一番の方法は」何か意見を求める質問には、「人のお付き合いを大事にすること」、「近所、親戚の付き合い」（4名）との回答があった。その他、「子孫に言い伝える（2名）」、「郷土愛を育む（1名）」、「お年寄りを大事にすること（1名）」などがあった。島民が島民同士の付き合いを非常に大事にしていることが調査結果から見られる。

5. 考 察

日間賀島は愛知県三河湾に浮かぶ三つの島（日間賀島・篠島・佐久島）の中で面積が最も狭いが、人口が一番多くて観光業も最も発達している。愛知三島の中で少子高齢・過疎化は他二島ほど急速にはないが、ゆっくりと進んでいる。そのため、日間賀島では、漁業、観光業などに一生懸命力を入れて若い者の職場の確保や地域の活性化対策などを行っている。一方、篠島と同じように一色町に所属している佐久島との交流はほとんどない。距離的に非常に近い愛知三島が互いに連携して島における活性化を打ち出したらよいのではないかと思われる。

通過儀礼について篠島と同じように南知多町に所属しているため、通過儀礼の風習は篠島とよく似ているが、篠島で既になくなった念仏婆さん組織と神主がまだ日間賀島には存在しているので、篠島より伝統儀式を守っていると言える。また、少子高齢・過疎化の影響により通過儀礼が簡素化してきたのではなく、時代の流れが大きいと思われる。まず、出産（自宅から病院）、結婚（島内の自宅から島外の結婚式場）、死亡場所（自宅から病院）

の変化が主な理由である。そして観光業の発達により島外との交流が活発になるにつれ伝統風習もだんだん都会化してゆく。その中で結婚式の変化が最も激しい。一方、厄年と葬式は変化が最小限に留まっている。日常生活に常に危険性が伴っている漁民生活では、厄払いは今でも重視されている為である。また、葬式の時に葬式業者にあまり頼らず、島民たちが互いに助け合うことによって島の人間関係が深く繋がっている。「島中親戚」という言葉が今でも使われているのはその証左である。

その他、一つ特徴的なものは、アンケート調査結果にも出たように、島では、長寿祝いはほとんど行われていないことである。島で行われなくなった通過儀礼は何かという質問に対して、長寿祝いはその上位に入っている。同時に一番残してほしい通過儀礼は何かという質問に対して長寿祝いはほとんど選ばれなかった。アンケートに回答した島民たちが主に30～40代であるのが一因であるとも思われるが、瀬川清子氏が書いた『日間賀島民俗誌』（昭和26年）の中にも長寿祝いに関する記述はなかったことから、長寿祝いが日間賀島で盛んに行われる通過儀礼ではなく、そのため島民の関心が薄いのだとも推測できる。逆に、厄年の祝いについて以下のように書かれている。「25歳、42歳、61歳、77歳を、オヤクサイと言って、2月の初午に、嫁とりよりも盛大に祝う。即ち、初午の日の前日に祝い、夜中親類がついてお宮めぐりをして、餅とお神酒を供える。馬頭観音をはじめ、山中のお堂に詣り、最後に、はいた草履を山神に置いてくる。赤飯を村中にまわす。村ではヤクサイの人の祈祷をする。初轍も15歳のタテオサメ¹⁶も厄年である。…¹⁷」つまり、島では、古くから長寿祝いは厄年の祝いと見なしていたのではないかと思われる。穢れに関する厄払いを特に重視してきた島民は、アンケート調査の中で一番残してほしい通過儀礼は何かという質問に対して、厄払いを挙げる回答が多かったことがそれを裏付けている。初轍、15歳のタテオサメ、61歳、77歳はいつの間にか厄年の祝いリストから外されたが、その代わりとなる長寿祝いも行われていない。島が独自に長寿祝いを設けたら、年長者を仰ぐと共に新しい通過儀礼を通じて島の活性化にも繋がると思われる。

謝辞

今回の調査に協力して頂いた日間賀島の方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 愛知県地域振興部地域政策課（2007）『愛知の離島』
 愛知県知多郡南知多町役場（2008）『データブック南知多平成20年度版』
 愛知県南知多町企画情報課（2006）『篠島、日間賀島の概要』
 榊原剛（2006）「日間賀島の婚姻、しほり加工、若衆宿について」『郷土研究誌 みなみ』第82号、南知多町教育委員会
 榊原剛（2007）「日間賀島の通婚圏」『郷土研究誌 みなみ』第83号、南知多町教育委員会

¹⁶ 男女が15歳になると「立て収め」と言って初節句に飾った鎧冑人形と雛人形を片付ける。

¹⁷ 瀬川清子『日間賀島民俗誌』刀江書院、1951.pp.44-pp.45.

榊原剛（2007）「日間賀島の若衆宿について」『郷土研究誌 みなみ』第84号、南知多町教育委会

瀬川清子（1951）『日間賀島民俗誌』刀江書院

畑聰一郎（2002）「葬儀と墓制の変化」『日本民俗学』231号、日本民俗学会

竹田旦（1968）「愛知三島（愛知県知多郡・幡豆郡）」『離島の民俗』岩崎美術社

中山勝比古（2007）『日間賀島「想いのビジネス」の取り組み』漁港漁場漁村技術研究所

南知多町誌編さん（1991）『南知多町本文編』南知多町

参考写真



（日間賀島の全景、資料出处：日間賀島観光協会<http://www.himaka.com/>）



（タコ記念塔）



「国道1号線」